

平成 27 年 2 月 14 日（土）協働のまちづくり活動支援事業報告会を開催しました！

■ 開催の主旨

市民と行政による協働のまちづくりを推進するため、NPO・市民活動団体等と市民の皆さんとの交流と地域コミュニティの再生や住民主体のまちづくりを考える機会として、市が支援した協働のまちづくり活動支援事業の成果発表となる平成 26 年度報告会を開催しました。

1 日時・場所

- 平成 27 年 2 月 14 日（土） 午後 1 時 30 分～4 時 30 分
- 江別市民活動センター・あい（江別市野幌町 10 番地の 1 イオンタウン江別 2 階）

2 プログラム

●協働のまちづくり活動支援事業の事例報告

○報告団体（報告順）※カッコ内は連携団体

江別子ども劇場

あおむし人形劇団

江別創造舎（のっぽろ七丁目放送局）

NGO 江別で外国人と仲良くしよう！（北海道情報大学異文化交流会）

幸せなまちづくり江別の会（大麻ジュニアクラブ）

語り・ひとり芝居ぐるーぷ うるうる亭

メディネット江別（江別観光ボランティアガイド）

●事業報告会コメンテーター（左から、千里氏、宮本氏、阿部氏）



千里 政文 氏（北翔大学大学院生涯学習学研究所 教授）

宮本 奏 氏（NPOファシリテーションきたのわ 代表）

阿部 晃治 氏（江別市自治会連絡協議会 会長）

●各団体の事業報告及びコメンテーターの質疑・コメント（概要）

【江別子ども劇場】

「江別子ども演劇クラブ」

発表者：今回の助成金でチラシを5,000部作成させていただいた。各種イベント時に折込みを行い、またポスター作成して市内の全小学校に配布するなどPRに力を入れた。道新にも記事として「江別子ども演劇クラブ」の活動を取り上げていただいた。

活動報告としては、6月から9月にかけては練習に力を注ぎ、10月は大麻公民館や公共施設での発表、11月9日にはえぽあホールで「子ども文化祭」のステージで成果発表、12月13日にはクリスマスパーティー、1月に入ってから大麻体育館での練習を行った。また、音楽作成にも力を入れた。メンバーの子が作曲し、録音スタジオでみんなの合唱を録音するとともに、みんなで踊るという形をとった。

今後の予定は、週に2回の練習で、小話や落語も取り入れながら、新たな演目にも挑戦していきたいと思っている。市内の小学生～中学生がメンバーだが、「表現力、コミュニケーション力を身につける」、「一人ひとりの力を付けたい」ということを目的に進めていく。この事業展開の中でメンバー増につながることも目的にしたい。専門性・独創性発揮のために、プロから学び、そして子どもたちによるオリジナル楽曲の作成をした。市民的な広がりとしては、子ども文化祭で500名以上の方に見ていただいた。本日は子どもたちが来てくれているので、演舞をご覧いただきたい。

宮本：自分も劇団の経験がある。表現ももちろんであるが、度胸もつく。自分の学校の仲間だけではなく、他校との交流で生まれる出会いが刺激になり、互いの意欲も高まると思う。地域の子も達が集まって一つのことをつくる活動を通し、さらに「江別子ども演劇クラブ」が出会いや喜びが高まることを期待している。広報PRに関しても力を入れて良い結果につながっていると感じられる。よいスタートを切ったのではないかな。

阿部：この一年でよくここまで頑張ったと思うし、更に目的とされている「人とのコミュニケーション能力を高める」活動をしていただきたいと思う。子どもたちが地域活動の主体となってくれることを期待している。

千里：子ども達と一緒にまちづくりに関わるということはずごく素晴らしいこと。大人中心ではなく、将来を担う子ども達の活躍が大事である。ますます頑張ってもらいたいと思う。「劇団」という枠にとらわれず、横のつながりを幅広く、市民を含める活動をしてほしいと思う。



【あおむし人形劇団】

『楽しい!』と輝いてくれる目を求めよう～手作り人形劇の楽しさを～



発表者：今年度は3つの目的を持って活動を行った。今まで以上に多くの方、多世代の方に人形劇を楽しんでいただいた。人形劇を通して地域の交流を目指し、劇団としても今まで培ってきたことを発揮し質を高めながら、人形劇を身近な文化として触れていただけるように活動してきた。

公演先の拡大と地域の交流を図ることを目的として、出演数は19回を重ねた。中でも自治会からお声掛けいただき、敬老会で公演した際、人形劇は子ども世代だけのもの

ではなく、どの世代にも楽しんでいただける文化として広げていけることを実感した。また、市民会館の自主事業の中での公演も行わせていただき盛況であった。そういった様々な機会の中で、次の公演に呼んでいただく等の出会いもあり、今年の活動が次へとつながっていく実感を得た一年であった。

反省点としては、公演数や活動が増えた反面、練習時間の足りなさがある。公演後には、子どもたちに演目の内容のお話をしたり、一緒に工作をしたりという活動も行ってきた。今年出来たネットワークを大切にしながら、活動を広げていきたいと思っている。

宮本：特に自治会向け、大人向け、そういった新しい一歩もあったのかと思った。今後どういふところに届けていきたいか、新しい層が見えてきたのか、もっと届けたい人たち（層）が見えてきたのか教えてほしい。

発表者：子どもたちのリピーターが増えたということがあり、これは嬉しいことであった。PRチラシを配布したのが7月頃で、年間行事が決まった後ということもあった。やはり新しいところに行きたい、公演したいという気持ちがあるので、来年度は早めに配布し活動を広げたい。自治会はじめお年寄りとの交流も深めていきたい。

阿部：去年は自治会に来てくれてありがとうございました。ほのぼのとした良さもあり、子供の頃に帰った様にした。自治会のPR不足ということもあるかも知れないが、「あおむし人形劇団を知らなかった」という声もあった。今後も、公演後の交流も深めながら、年齢に関係なく、幅広く豊かな活動をしてください。

千里：19回の公演をされているが、苦労した点を教えてください。

発表者：団員の少なさということもあるが、十分な時間が取れないことからくる練習不足を感じた。公演先の皆様のご協力もあって、全体としてスムーズに公演は行えた。

【江別創造舎】（連携先：のっぽろ七丁目放送局）

「江別カルタで辿る江別物語 2014」



発表者：江別カルタを活用した地域文化振興活動を行うことを目的に、江別文化の伝承、世代間を超えたツールとしてカルタの活用を行い、今年度の事業展開をした。江別の文化・歴史を再認識していただく機会の提供、教育機関や福祉施設等をはじめ公的および民間の機関との交流から地域文化振興を通じたコミュニティの拡大を目指した。

今年度も昨年度と同様に、のっぽろ七丁目放送局との連携事業として江別カルタの題材（文化・歴史を題材）を現在の江別の街の画像とリンクさせた動画を制作、江別カルタの題材にまつわる江別まち検定クイズ大会、江別カルタ大会を開催し、江別カルタ大会のライブ映像を中継配信した。

お年寄りから若い世代へと、世代間を繋ぐコミュニケーションツールとしてカルタを活用し、デジタルツールを活用することにより、地域を越えたコミュニティの広がりを感じた。江別市民会館小ホールで開催したカルタ大会では、会場来場者数 34 名・ネットライブ中継視聴者 91 余名を数えた。

広報については、昨年度に比して早期の活動をし、民間および公的機関、市内保育園・幼稚園等にも直接広報活動を行ったが、参加者への実数に結びつける難しさを実感した。今後の課題として捉え、検討を重ねていく。

連携先（のっぽろ七丁目放送局）

昨年に引き続き、インターネットテレビ生中継を行い、知名度が上がっていることを実感した。江別の文化的活動をアーカイブに残ることによる継続的理解を高めること、江別在住者をはじめ、メディア関係者、江別市広報の方々等、多くの皆様に江別の文化・歴史に興味をもっていただくことができたと感じている。

今後も江別創造舎との連携による江別の文化振興活動を継続し、江別のアピールのためのネットテレビ有効活用に尽力していきたい。また、アーカイブを残すことによって映像の図書館としての機能を拡充していきたい。

宮本：歴史とのつながりが良かったと思う。さて、活動は様々あるが、認知度を上げることも重要で、「出向くこと」というのが大事だと思う。そうでないと、「関係者に来てもらう」、「関心のある方が集まることが多い」ということになりがちな面があると思う。「江別カルタ」を知らない方向けや、幼稚園や学校での活動なども面白いのではないかなと思う。

阿部：江別カルタには 48 の句がある。このカルタの字句の表現の仕方に関して、6 月の選考会の時、一部修正を加えるなどの工夫の余地があるのではという話をしたが、改訂していく部分はあるか。

発表者：第二版を作る中で修正、改訂を行った。

阿部：自己評価票及び発表では、カルタ大会会場参加者は34名、ネット視聴者91名となっている。市民への広がり、継続性、そして今後活動を広めるためにも、のっぽろ七丁目放送局さんと一緒に活動されると思うが、今後の新たな展開はあるか。

発表者：各団体の発表を拝聴していた中で、今後連携をしていければ良いなと感じていた。また、できれば福祉施設を廻りたいという希望を当初から持っているので、その中でお孫さん世代から高齢世代までの交流の一助となればと願っている。

**【NGO 江別で外国人と仲良くしよう！】（連携先：北海道情報大学異文化交流会）
「江別青年国際交流会」**



発表者：今年度は10月と2月に交流イベントを開催した。3月に2回開催を予定しているので、中間報告となる。

10月には8カ国の方々に参加いただき交流イベントを開催した。外国人25名、日本人26名、計51名が参加した。活発な交流の機会となり、今も情報交換等が続いている。江別在住の日本人と交流を求めて札幌から来た外国人・留学生もいた。また、留学で江別、また近郊に来ている留学生の中には寂しさを抱えている人もいて、その解消

になったこと、参加者の中に精神的な余裕が生まれたことは大きな意味があったと思う。江別で開催したことにより、江別の認知度や注目が進んだこと、国籍や文化が違っても「同じ江別の住人だ」という意識が芽生えたことも大切なことだったと思う。

江別クイズを通じて、留学生・外国人に江別の魅力を伝え、江別の食材で作った美味しい日本料理（おしるこ）や創作和食（かつ丼スティック）でおもてなしをして、江別の食の素晴らしさを実感してもらえたと思う。

2月には餅つき大会を行った。日本の餅つきを一方的に教えるだけではなく、日韓のお互いの餅文化、餅つき文化について語り合いながら作業を進め、この共同作業自体がよい交流となった。江別のもち米でお餅をつくり、江別の食材の美味しさを伝えることが出来たと思う。来年に向けては、「国際餅つき大会」としてお餅というコンテンツを通じ、各国の食べ方を共有するイベントを検討している。

千里：今後の企画はどのようにしていくのか？また、四大学との連携は？

発表者：20代、30代の学生、社会人を中心に行っていく。四大学については各大学に活動をPRし、リーダー同士のつながりも生まれ、今後の連携が楽しみな状況である。

千里：ぜひ大学だけでなく、大学講師、市民の参加を促しながら、特定の人たちと言われたいよう幅を広く持って活動をしていただきたいと思う。

阿部：若い人の国際交流は良いことである。さて、既に活動されている国際交流団体のとの違いはどこにあるのか。また、現在の活動のメンバー及び参加者の学生と社会人の比率を教えてください。

発表者：地元大学の本当に若い世代が、準備・開催・運営をし、自分達で考えてやったことがひとつあると思う。この中から、今までにない新しい視点が生まれるところだと思う。メンバーと参加者の比率については、学生70%、社会人30%である。

阿部：どちらかの国の特色に依存して楽しむということにならないよう、日本の文化を大切に、相互交流を意識して活動を広げていただきたいと思う。

宮本：20代、30代有志で企画してやるというのは可能性が広がることだと思う。何より国際交流を通じて市民参加が広がれば、地域の方々、商店街の方達の参加を促す活動を期待している。

**【幸せなまちづくり江別の会】（連携先：大麻ジュニアクラブ）
「ありがとうポストを設置しよう」**

発表者：事業の背景としては、市民と病院のより良い関係を模索する中で、日本全国には、地域医療を守り・育てる住民活動がたくさんあることがわかり、2012年全国シンポジウムに参加して「江別市の当時と今」を報告してきた事があった。江別にもありがとうポストを設置したい、との思いから日本各地の「ありがとうポスト」の例も参考にした。今年度の取り組みとして「ありがとうカード」を作成がある。大麻ジュニアクラブにイラストを描いていただき、35枚の力作の中から人気投票を行い5種類のカードを完成させた。また、ニュースレター「ありがとう新聞」を4回発行した。

来年度以降の計画としては、子どもたちとありがとうポストを作り、江別市立病院に設置してもらおう働きかけながら、他の施設にも設置してもらえよう認知度を高める活動を進めていきたい。



千里：医療現場ではお医者さんの人材不足ということ、また反面に人口減少ということがある。「あ

りがとう」を伝えるのは大事なことである。特定の病院、医院だけでなく、ありがとうを伝える活動を広げて行ってほしいと思う。

宮本：丁寧な説明ありがとうございました。カードは 5,000 枚作成し、3 年計画ということか。2 年目にはポストを設置予定となっているが、もう一步スピード感を持って、今年度から設置への働きかけを行うなど、活動が広がってきたタイミングを逃さないように臨機応変に活動の内容を広げて行ってほしいと思う。

阿部：あたたかい人間関係のために続けて行って欲しい活動だと思う。3 年計画となっているが、その後の継続、持続はどう考えているか。

発表者：一定数のカードがあるうちは、他院にも働きかけて活動を続けて行きたいと思っている。ありがとうカードの効果が出れば、やっていくうちに予算や手法を考えながら継続に向けて増刷も検討していけると思う。

【語り・ひとり芝居ぐるーぷ うるうる亭】

「えべつ俄（にわか）」



発表者：「えべつ俄（にわか）」を通し、一般市民（子どもから大人まで）、道民そして全国民を対象に江別の町をアピールしていきたい、知名度を上げていきたいという思いで、全国の誰もが「えべつ俄（にわか）」を知っているという風にしていきたいと活動を始めた。

今年度の事業で助成をいただいたこともあり、親しみやすいキャラクターであるクマ・シカ・シャケを登場させることによって、幼児からお年寄りまで情報を共有する楽し

みをもつ染幕を作成した。発注から納品まで江別で行い、このように染幕が完成した。

今年度実施した事業に関しては自己評価票に記載の通りとなっていて、7 本の公演で、多いところでは 400 名の観客の前で「えべつ俄（にわか）」の公演を行った。

実際に見てくれた人には、強くアピールできた実感はあり、楽しんでもらえることができたが、話題性を広める面ではまだ工夫の余地があると思っている。

「えべつ俄（にわか）」という言葉を他の人がしゃべってくれない、書いてくれないという現実もあり、受け入れて欲しいという気持ちと共に、伝統芸能として定着し、知名度を上げるには、10 年はかかると覚悟しているので、江別の住民にこの地域の特殊性・優位性を意識させ、郷土意識を盛り上げられるよう、頑張っていきたい。

宮本：助成金を受けるということは簡単なことではないから、どうか一年目で作られた土台からこの先に向かって、この染幕をもって企画し、集客して、次年度、次年度へと進んで行っていただきたいと思う。

阿部：江別を意識された染幕の図柄の中に鮭があるが、染幕もさることながら、物語の中に江別特産である「八目鰻」などを折り込むというのはどうか。

文化というのは地域資源であり、郷土資源だと思う。この先もぜひ連携団体との活動も増やしながらか活躍して行ってほしいと思う。

**【メディネット江別】（連携先：江別観光ボランティアガイド）
「我がまち江別を知ろう、知らせよう事業」**



発表者：概要としては、観光ボランティアガイド活動状況を街歩きに随行し撮影、歴史ある建造物や名所旧跡の紹介ビデオ制作を行い、メディアで記録・発信する。メディネット江別「えべつTV」HP情報発信・DVD化し、観光ボランティアガイド、観光協会、情報図書館へ提供。撮影スタッフの育成を本年度のメイン事業に進めた。まずは活動実績として撮影したものをご覧ください。

市内イベント・市民活動などは、ホルスタインショウ、まると江別、見晴台避難訓練、あおむし人形劇団、江別スノーフェスティバル等々の撮影をし、DVDをそれぞれの担当の方に提供している。また、江北まちづくり会の活動記録も行っている。

今年度の支援事業の中から編集ソフトの入ったパソコンの購入をした。これに伴うビデオ講座を2回行い、延べ人数8名が参加した。

江別観光ボランティアガイドの活動実績も発表のとおりである。全部残してあげたいが20回という数があって全部は残せない。今後も連携をしていきたいと思う。

本事業による効果としては、ICTにより、江別市を全国へ知らせることについては、アクセス向上があると思う。また、「生涯学習」、「地域学習」の記録、市民活動団体への活動紹介ビデオ作成、江北地域まちづくり会への協力・支援等を進めた。

事業の収支見込みは、ご覧のとおりである。これは支援事業内の収支見込みであり、会としてはもっと様々な動き、収支がある。

千里：自分たちの活動の中々カタチに残せないという様々な市民団体の実情があるかと思う。そういった意味では非常に重要な活動だと思う。さて、メディネットさんの記録されたデータはHPから見られるのか。また、ネットがなくてもコンテンツを見られる工夫はされているか。

発表者：コンテンツの数は 250 くらいある。常時映像を見られる場所はないが、市の HP から閲覧するような仕組みはどうか、また、TV 局の利用も模索中である。

千里：たくさんの市民に見ていただけるよう工夫をしていただきたいと思います。

宮本：課題の中にスタッフの育成があったが、今年度の結果はどうだったか。

発表者：人材育成に力を入れたが人数は増えなかった。しかし、結果としてやりやすくなった。今後は、あじさい亭さんと連携するなど、待っているのではなく出向いて行く方向にしたいと考えている。

阿部：情報図書館への寄贈に関してだが、今後市民向けにコンテンツやテーマを絞っていくことはできないか。また、メディアはデジタルだけでなく、印刷物にしていくという方向性はないか。

発表者：江別観光ボランティアガイドからの発信という部分もあるので、検討していきたい。

<報告会全体総評> 千里 政文 氏

平成 26 年度「協働のまちづくり活動支援事業報告会」への皆さんの参加、本当にありがとうございます。

6 月の選考会から選考委員、コメンテーターとして参加させていただいた。今年度は応募団体も多く、選考会の中で出された条件をクリアしてもらって協働のまちづくりの活動に参加していただく運びとなった。限られた時間の中で、多くの方が関わりあいながら、予定したものをこなし、活動されたと感じている。

ひとつ、反省点があるとすれば、いかに情報を伝えるかということがあると思う。情報を共有するというのも本当に難しいことだと感じているが、皆さん頑張って活動されている中で、その範疇だけに収まってしまって、市民に取組が伝わらないという部分があると思う。探せば見つかる情報を伝えていくことが重要である。各団体、更に広報も含めて頑張ってほしいと思う。

いろいろな人がいて、いろいろな人が混ざり合う中で、本当のまちづくりが成り立つのだということをおさんの活動を通し、今回の報告会で改めて感じた。

今年度も皆さんの力で、「協働のまちづくり活動支援事業報告会」ができたことに感謝申し上げ、報告会総評としたい。